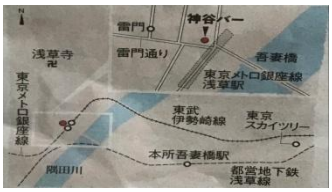
浅草に根ざす明治期のバー

写真は朝日 4 日朝刊「はじまりを歩く」掲載、浅草 1 丁目 1 番 1 号に立つ神谷バー。夜になるとライトアップされ、レトロなムードをかもし出す。右後方に見えるのは東武浅草駅。

鉄筋コンクリート造りで 1921(大正 10)年に落成した神谷バーのビルは浅草のランドマーク。関東大震災にも東京大空襲にも焼け残った。増改築や改装を繰り返したが、外観(店舗は 3 階まで)はレトロな時代の面影をとどめており、国の登録有形文化財にもなっている。



1880(明治 13)年に創業し、「日本最古の洋風酒場」と呼ばれる神谷バー。その数年後に生まれたのが店の代名詞でもあるデンキブラン(当時は「電氣ブランデー」)だ。最先端のもの、ハイカラなものを「電氣〇〇」と呼んでいた時代。初代社長の神谷傳兵衛が名前とともに考案したという、成分はブランデーを主体にワインやジン、薬草など。製造法はいまも秘伝である。

「浅草は古い伝統や人情を残しつつ時代の先端的なものを取り入れ、浅草風に定着させてしまう不思議な街。神谷バーにしろデンキブランにしろ、おそらく浅草以外の土地では受け入れられなかっただろう」そう語っていたのは、浅草に住みながら『浅草のみだおれ』など浅草に関する著書を出した作家の故・吉村平吉さんだった。たしかに浅草オペラにしろ、日本初のエレベーターつきビル「凌雲閣」にしろ、浅草の洋風文化や建築物は不思議なまでに浅草の水に溶け込んでいたと言っていい。しかもどこか懐かしく、じんわりと人のぬくもりがある。高級めかしたスノビズム(俗物根性)を嫌うのが浅草である。

この記事に注目したのは、東京に調査研究で行った帰り、浅草まで足を伸ばして神谷バーに立ち寄ったからだ。1 階のバーはいつも常連さんたちで満員であり、2 階のレストランを利用することが多かった。まずはデンキブランと生ビール、煮込みや串カツ、サラダなどを注文する。はじめてデンキブランを飲んだとき、まるで電気が走るようにピリピリときたものだ。記事でも「神谷の酒を飲んだかい?　ありゃまるで電気だぜ。ピリピリくらァ」。うわさ好きの浅草っ子の間でたちまち評判は広まったにちがいない」と書かれている。店内をぐるぐる歩き回る店員さんたちの動きも、神谷バーらしい。

また浅草の街、神谷バーを訪ねたくなった。

(2021 年 12 月 6 日)